大学教育学会＠大阪大学
2023/06/04
部会15

日本の大学におけるTintoによる学業継続モデルの適用可能性に関する検討

小湊卓夫（九州大学）
田中秀典（宮崎大学）
藤原宏司（山形大学）

はじめに

- 米国のリテンション研究では、1970年代以降、多様な学業継続モデル(Student Persistence Model)、学生退学モデル(Student Attrition Model)が提唱され、学業継続や退学に影響を及ぼす要因間の相関関係の解明や退学予測モデルとして活用されている。
- その中でも大きな影響を与えたVincent Tintoのモデルを取り上げその特徴を整理するとともに日本への適用の課題を明らかにしたい。

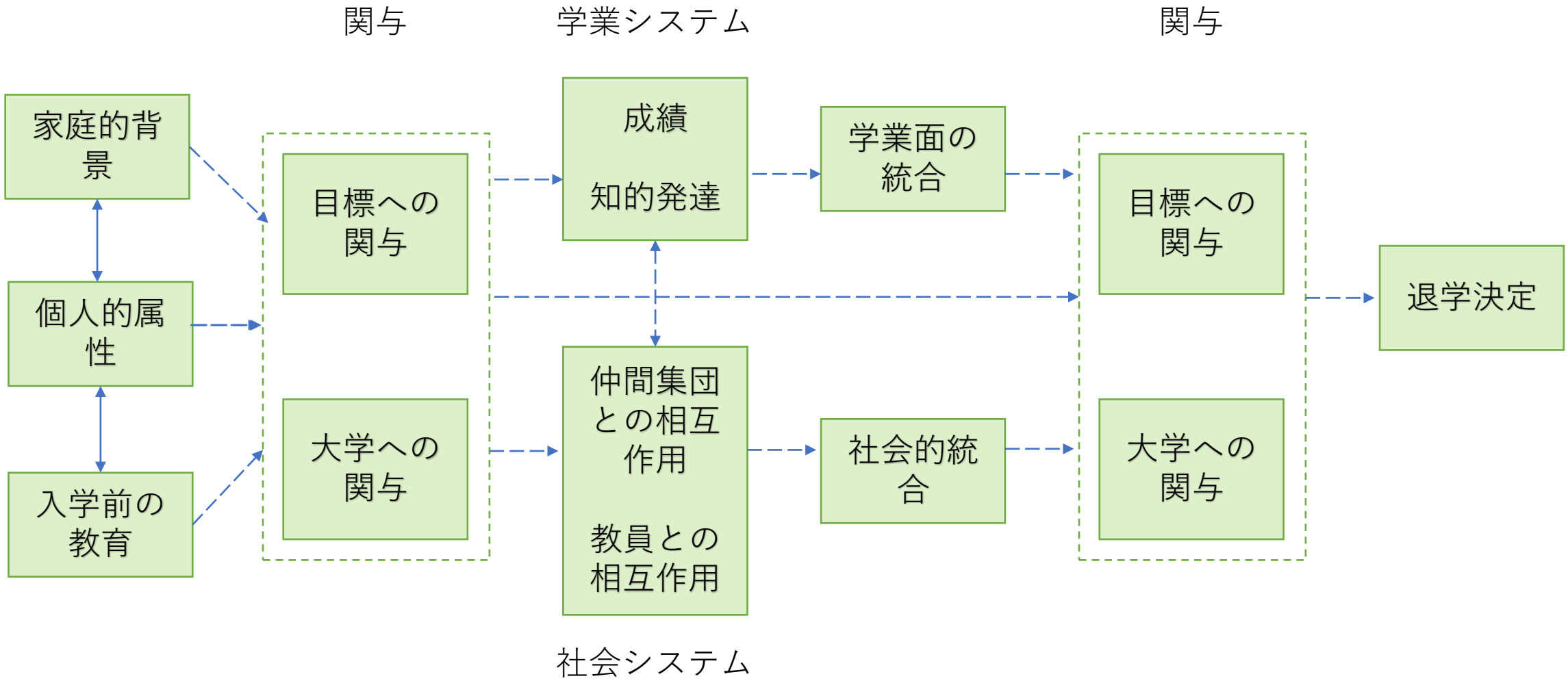
米国における退学研究

- 大学における高い中退率≒低いリテンションレートが問題化
- 退学要因とそのプロセスの明確化は、退学予防・最小化に役立つと考えられてきた
- 大学生の退学が大学組織と学生の相互作用によって影響を受けるという視点がモデルとして検討され始めるのはSpady（1970）のモデル以降→一つの研究領域として認識(Nicoletti, 2019)
- Spadyモデルは、デュルケムから社会的統合の概念を援用し、大学内における学業システムと社会的システムを組み込んだ
- TintoモデルはSpadyモデルの影響を受けている

Tintoの概念モデルの構成要素

- 個人と教育機関の相互作用によって退学する過程を説明し、その過程が明確に異なる退学行動をもたらすことを区別する理論モデルの構築を目指した(Tinto,1975)
- 学生は家庭背景、個人特性、入学前の学習歴、といった属性をもって入学
- その属性は学位取得の動機、学生の期待の両方に関与するという形で影響する
- 学業継続における直接的要因は大学環境への統合という視点
- 具体的には学業面の統合と社会的統合のであり、それは規範的統合と構造的統合の異なる類型の統合のもとで行われる
- このプロセスを通じて、学生の関与は強化されたり弱化されたりして、結果として継続か退学かが決定される

Tintoの概念モデル（初期）



アナロジーとしてのデュルケムの統合概念

- 自殺は個人が社会の構造に十分に統合されない時に起こりやすい
  - 道徳的（価値的）統合の不足＝社会集団の価値観との乖離
  - 集団帰属意識の不足＝集団の構成員との相互作用の不足
  - 上記二つの統合の欠如→自殺の可能性が高まる
- 二つの統合の欠如は、主に社会状況によってもたらされる

- Tintoは大学を一つの社会システムとみなし、アナロジーとしてとらえた＝大学という社会システムへの統合の欠如は、その社会システムへのコミットメントの低下を招き、退学する確率を高める

Tintoモデルの特徴

- 入学から継続/退学までのプロセスを概念化したモデル＝時間依存的・縦断的
- 直感的に理解しやすい単純な概念モデル＝入力変数の検討の困難性と拡張性(Nicoletti, 2019)
  - 家庭的背景、個人的属性、入学前教育に関し、どの範囲まで考慮しなければならないのか
  - 学業面の統合は学士課程教育における学部教育の多様性を考慮すると異なる傾向にあるのではないか
  - 高等教育機関の特性（資源、施設、構成員等）を組み入れる必要性
- 個別機関ごとのモデル構築の可能性
- 学生のコミットメントの重視→現実的な対応策への示唆

Tintoモデルの特徴

- Tintoモデルはいくつかのバリエーションが存在する
- Tintoモデルは概念モデルであり、統計モデル（予測モデル）を当初目指していたわけではない。
- 変数の設定がなされていないため検証の困難を伴う
- そのため、米国では多くの検証が行われ、モデルの修正や限界が指摘されている(Nicoletti, 2019)

米国における退学予防

- 退学しそうな学生（At-Risk Students）を特定する

  シンプルな方法：単純な要因分析の結果を使う

  - 例：First-generation students, Students from low-income families, etc.
  - ただし、現在では差別に繋がるという危険性から、このような「直接的」な特定手法は良くないという意見もある。

  複雑な方法：システムを導入／構築してリスクのある学生を特定（Early Alert System）

  - 大学独自に作成：藤原（2016）, etc.
  - システムを導入：anthology Beacon,
    Ellucian CRM Advise, etc.

どのようにしてEASが機能するか

1. EASに、その大学における過去も含めた学生に関する大量のデータを投入する（大量の予測変数を使用）
2. 予測モデルの構築と最適化
3. 予測モデルによる「At-Risk Students」の特定
4. 早期介入＆支援サービス等の実施
   a. アカデミックアドバイジング（学業に関すること）
   b. カウンセリング（生活面等に関すること）
   c. 経済的支援（可能であれば）
   d. Learning Community等への招待

Retention Program ← Tinto's integration model

- 予測モデルのアップデート（定期的に）

問題点と現在の流れ

問題点

■「At-Risk Students」を特定できたとしても、その学生を翻意させることは難しい

- 藤原（2016）他、米国の担当者へのインタビュー等から

現在の流れ

■Student Successの考え方

■学生が自大学を辞めたとしても、学業を継続し最終的には「何処かの大学を卒業すれば良い、という考え方
(学生が”Learning Process”を完遂する → Success)

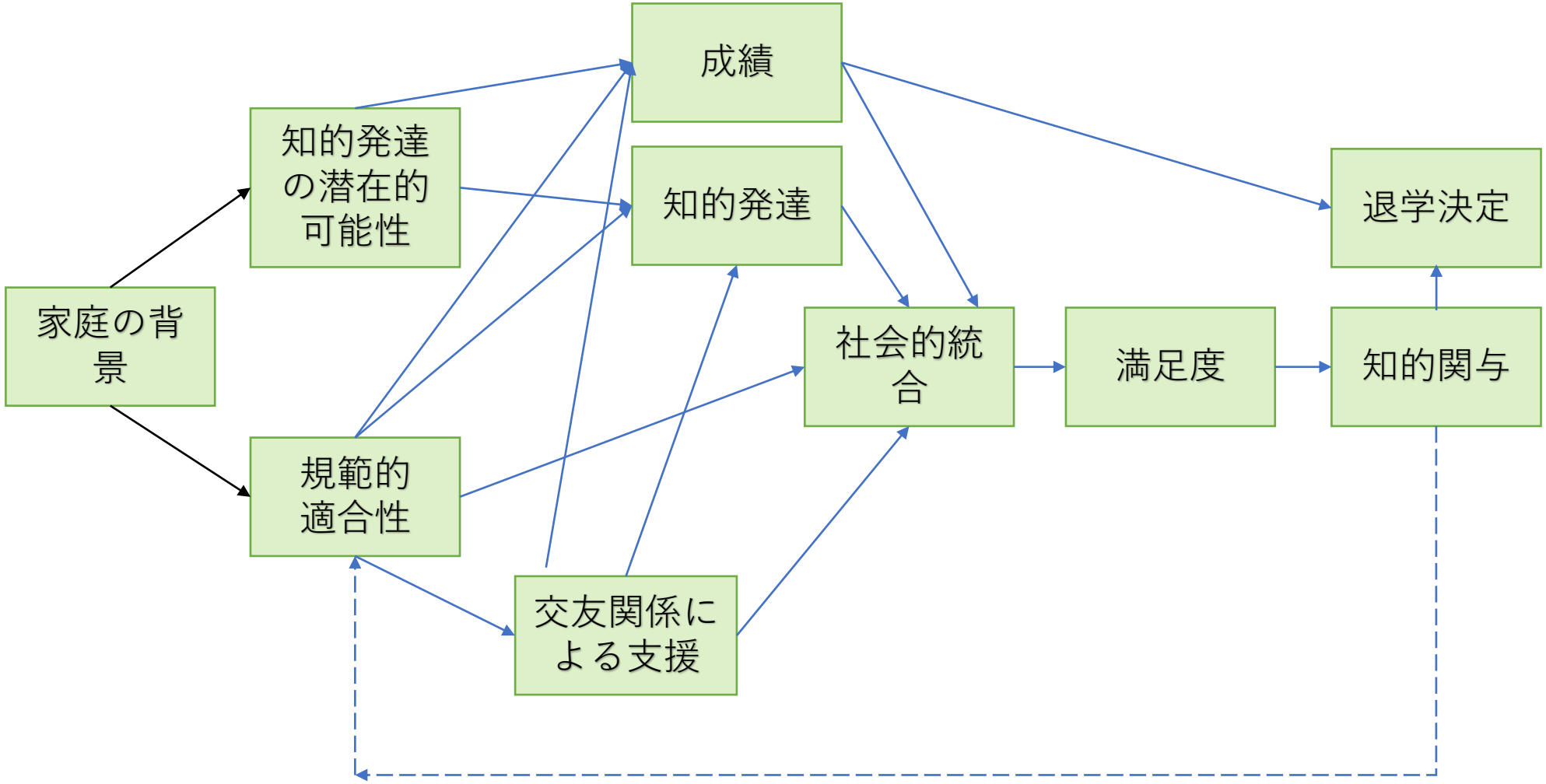
■Tinto: From Retention to Persistence

日本への適用における課題

- 日本でも退学予測モデルに関する論文が散見される＝個別の大学データを活用した予測モデルの構築→個別機関ごとの適用と検証に関する研究の不在
- 変数の設定とデータの限界＝活用可能なデータの収集と蓄積への課題（個別機関のみならず大学関連団体や政府の取組の必要性）
- 米国と比して日本の退学率は低いが、不本意入学をはじめ統合が不十分なまま卒業する学生が多いと推察される＝機関内の統合より、外部環境圧力が強く働く可能性
- Student Successは機関内でしか検討されない（大学を移って学業を続けるケースは限定的）→Tintoモデルの限定的な適用？

参考文献

- Aljohani, O. (2016). A Comprehensive Review of the Major Studies and Theoretical Models of Student Retention in Higher Education. *Higher Education Studies*, 6(2), 1-18.
- Nicoletti, M. C. (2019). Revisiting the Tinto's Theoretical Dropout Model. *Higher Education Studies*, 9(3), 52-64.
- Seidman, A. (Ed.). (2005). *College student retention: Formula for student success*. Greenwood Publishing Group.
- Spady, W. (1970). Dropouts from higher education: An interdisciplinary review and synthesis. *Interchange*, 1(1), 64-85.
- Tinto, V. (1975). Dropout from higher education: A theoretical synthesis of recent research. *Review of educational research,* 45(1), 89-125.
- Tinto, V. (1993). *Leaving College: Rethinking the Causes and Cures of Student Attrition* (2nd ed.). University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Tinto, V. (1982). Limits of Theory and Practice in Student Attrition. *The Journal of Higher Education*, 53(6), 687-700.
- 藤原宏司,（2016）「学業を中断する学生の予測モデル構築について」，『大学評価とIR』第5号，8-22.

参考

Spadyの学生退学プロセスモデル